

ベートーヴェン／交響曲第6番ヘ長調 Op.68「田園」

ベートーヴェン（1770-1827）はウィーンの森を散歩しながら楽想を思い浮かべたり、夏を郊外の保養地で過ごしたりと、自然のなかにいることが好きだったといわれる。緑の草原や美しい花々の咲く野原にいるとき、ベートーヴェンでなくとも人は安らぎを感じるものかもしれない。

「田園」交響曲は、ベートーヴェン自身が唯一、標題をつけた交響曲であるが、ベートーヴェンがこの作品で表現したかったのは自然の描写だけではなく、たしかに第2楽章ではナイチンゲールやウズラ、カッコウのさえずりをフルート、オーボエ、クラリネットが模倣したり、第4楽章でティンパニが雷鳴を表現したりと、描写的な手法が効果的に用いられてはいる。だが、1808年の初演時のヴァイオリンパート譜に「田園交響曲、あるいは田舎の生活の思い出 音画というよりも感情の表現」というタイトルが記されていたことから想像できるように、ベートーヴェンは「音画」つまり自然の描写ではなく、自然が人に呼び起こす「感情」を表現したかったと考えられる。平和な感情に満ちた第1～3楽章から、第4楽章の嵐を経て、第5楽章でふたたび安らぎがもどってくる時、音楽は自然への深い喜びと感謝の念に包まれる。

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロツポ、ヘ長調「田舎に着いた時の晴れ晴れとした気分の目覚め」：牧歌的な第一主題は誰にとっても親しみやすいものである。実はこの主題に含まれる音の動き（モチーフ）が、楽章のすみずみにまで生かされている。

第2楽章 アンダンテ・モルト・モート、変ロ長調「小川のほとりの情景」：水の流れやそよ風、小鳥たちのさえずりが安らぎをもたらす。

第3楽章 アレグロ、ヘ長調「田舎の人々の楽しい集い」：スケルツォ風の速い3拍子の音楽。

第4楽章 アレグロ、ヘ短調「雷雨、嵐」：弦のトレモロやティンパニが悪天候を描写する。

第5楽章 アレグレット、ヘ長調「羊飼いの歌。嵐の後の喜ばしく感謝に満ちた気持ち」：喜びの感情がじわじわと高揚していき、安らぎの中で音楽は幕を閉じる。

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。